一般コース

令和５年度
広島県瀬戸内高等学校一般入学試験問題

国　　語

（50　分）

注　意　事　項

1．試験開始の合図があるまで，この冊子を開いて見ないこと。
2．解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。
3．問題・解答用紙に落丁，乱丁，印刷不明な箇所があれば申し出ること。
4．問題・解答用紙の指定欄の太枠内に，受験番号を忘れずに記入すること。
5．問題・答案は試験終了後，監督員の指示によって回収するので，終了の合図までそのまま静かに着席していること。
6．余白は自由に使って良い。

受験番号	

【二】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

みなさんも、幼い頃、絵本に親しみながら、育ったことでしょう。①絵そのものを楽しみながら、想像する楽しみも覚えたのではないでしょうか。

絵には、物語がひそんでいます。

スペイン北部のアルタミラ洞窟（どうくつ）でみつかった壁画（a）は、旧石器時代の人類の祖先が描いたものですが、そこには狩猟の呪術（じゅじゅつ）（おまじない）※1としての牛、イノシシ、トナカイなどが描かれていました。※2

また、古代ギリシャの壺絵（つぼえ）には、たとえば、古代ギリシャの詩人ホメーロスの叙事詩（じょじし）「イーリアス」※3に登場する、アキレウスが描かれていました。トロイア戦争※4の時、トロイアの英雄ヘクトルを討ちとった勇将です。

この無敵の戦士にも、欠点が一つありました。母テティスが赤子のアキレウスを不死の液体につけた時、踵（かかと）を握っていたのでそこだけ不死の液がつかなかったのでした。そのため、踵を討たれてなくなったのです。そこで、後世、その踵をアキレウス腱（けん）（人の欠点・アキレス腱）と呼ぶようになりました。そういう物語が、アキレウスの絵にはかくれているのです。

ですから、アキレウスの絵を見て、その物語を想い浮かべるのです。

このように、どの絵本の絵にも物語がひそんでいます。言葉がそれをおぎなっている絵本が多いですが、物語を想像し、読みとる楽しみが、絵本をひらく楽しみでもあるのです。

歴史秘話をひそめていない絵本でも、《　X　》、いわさきちひろ※5の絵本には、絵を眺（なが）めて想像しながら追っていくと、かくれている物語が見えてきたりするのです。ページのかたすみに、小さなイチリン（b）の花を見つけたら、その意味を考えるのです。

『となりにきたこ』『ぽちのきたうみ』『戦火のなかの子どもたち』など、どれをとっても眺める人に、はっと感じさせ、考えさせる絵です。『ことりのくるひ』の母と子では、こどもに焦点があてられていて、母親の顔が見えません。《　Y　》描かれていないその顔が、おのずと見る者に想像できて、ほほえましくさえ感じさせます。「描かれていないことまで想像させる」絵がそこにあります。

このようにして、いつのまにか絵本を見ることによって、［　　］力が養われているのです。

北ヨーロッパのデンマークという国に、ハンス・クリスチャン・アンデルセンという童話作家がいました。「マーメイド」、つまり上半身が女性で、下半身が魚である人魚という、想像上の動物の話を書き、世界中で知られています。

このアンデルセンが、『絵のない絵本』を書きました。

絵を想像させる、言葉だけの物語本です。

お月様が地球をめぐりながら、世界のあちらこちらで見たことを語るのですが、挿絵なしだから、読者がいろいろと場面場面を想い浮かべるようになっているのです。みなさんのなかには、読んだ人がいることでしょう。

大切な人が死んでいく話とか、c墓地の話とか、暗い悲しい話が多くて、読むのを途中でやめたという人がいるかもしれません。

死にまつわるなんとなく暗い話になるのは、語り手がお月様だからです。

月の光は、太陽と違って、暖かくありませんし、植物を育てることもありません。ですから、ヨーロッパでは、月は「死」のイメージにつながり、日本人のいだくイメージとはまったく違うのです。

フランス留学中に、ロワール川沿いに中世のお城めぐりをして、パリへ帰る時のこと。列車の窓から、美しい満月が見えていました。しばらく見とれていて、ふと気がつくと、車内のフランス人は誰ひとり、満月に見入っていません。彼らには、月をめでる感性もなければ習慣もないのです。

虫の鳴き声についても、同じことがいえます。

デンマーク生まれのアンデルセンの月には、日本人のいだくイメージが、まったくありません。外国の絵本や童話をひらく時、②こういうことを頭に置いておく必要があります。

本題にもどって、③絵本が呼び起こすイメージは、目に訴えるものとはかぎりません。

※6はいじまのぶひこの絵本『きこえる？』は、文字通り、音のイメージをd<ruby>カンキ<rt></rt></ruby>する本です。たいへん異色の絵本として、注目されました。

樹木の葉が風に吹かれてゆれる音。それを、絵を見ながら聴き取るのです。

それから、つづきます――。

「はなの　ひらく　おと」「ほしの　ひかる　おと」「いきを　すう　おと」「いきを　はく　おと」「しんぞうの　うごく　おと」「かわの　ながれる　おと」「なみの　よせる　おと」「きみの　なまえを　よぶ　こえ」。

一度で、ぜんぶ聴き取れるわけではありません。

人生経験をいろいろ積み、年をへてこの本をひらく時、やっと聞こえる音だってあるでしょう。

そうなのです。経験とか知識を積み重ねて、はじめてイメージが湧くことだってあるのです。

「はなの　ひらく　おと」や「ほしの　ひかる　おと」などは、幼い子には無理かもしれません。大人にとっても、聴き取りがむずかしそう。

でも、そうとはかぎらないでしょう。

絵本は、詩とおなじく、感覚、つまり目、耳、鼻、舌、肌の五感によって、イメージするものです。絵本によってイメージが目にうかび、耳に聞こえ、鼻で嗅ぐことができ、舌に味がよみがえり、肌に触感が感じられる。それがまず楽しく、開放感がえられ、それによって自然に成長できれば、こんなにすばらしいことは、ないではありませんか。

アンデルセンの『絵のない絵本』とは反対に、言葉がひとこともない、文字通りの「絵だけの絵本」を描いている安野光雅※7という絵本作家がいます。

④安野光雅という名前が、世界の子どもたちに知られるきっかけになった、『ふしぎなえ』という絵本があります。

幼い子どもから小中学生向きのこの絵本には、言葉がまったくありません。『絵のない絵本』とは正反対の、言葉なき、絵のみの、文字通りの絵本です。

注意ぶかく絵をながめながら、自分でストーリーをつくる「絵本」だといえばいいでしょうか。

水面に映っている画像（虚像というべきか）と実際の画像をならべて描いたり、光が当たってできた影を実物とならべて描いたり、地球の引力を無視した画像があらわれたり、※8天橋立を見る時のように、股のぞきして見える新鮮な世界がえがかれたり、じつに面白い、新鮮な「ふしぎなえ」が、絵本のなかに出現していて、見る者を異次元の世界へつれさるのです。

シリーズものの『旅の絵本』では、ボートを漕いでたどりついた国で、馬をかりて、その国を旅するひとりの男性を、大きな風景のなかに、点のごとに配置して、外国（たとえばイギリス）の建物や人や自然をえがいています。

外国の街や人や自然を見ながら、旅行できるようになっています。

その案内者が、絵のなかのどこかに小さく描かれている、三角帽をかぶって、乗馬姿のひとりの男性。

そうして、それらの絵を楽しみながら、底にながれている一つの意図にふと気づくことになるのです。

人や建物や自然を捉えた大きな風景をながめながら、「人間のいとなみ」を考えさせる作者の意図。国がことなれば、自然も文化もことなります。

安野芸術のゆきつくところは、人間や世界について「考えさせる」点にあるといえるのではないでしょうか。

自分の頭で、よく考えること。

考えさせる絵本。

（小島　俊明著『ひとりで、考える』より）

※1　アルタミラ洞窟　―　スペインの北部に位置する洞窟。旧石器時代に描かれた彩色動物壁画は世界遺産に登録されている。
※2　旧石器時代　―　今から二百万年前の人類史上最古の時代。
※3　イーリアス　―　ホメーロスによって作られたギリシャ神話を題材とした最古最大の作品。様々な英雄や神々が登場する。
※4　トロイア戦争　―　ギリシャ神話に記述されている戦争。
※5　いわさきちひろ　―（一九一八ー一九七四）画家、絵本作家。
※6　はいじまのぶひこ　―（一九七〇～）美術作家。
※7　安野光雅　―（一九二八ー二〇二〇）日本の画家・装幀家・絵本作家。
※8　天橋立　―　京都府北部の宮津湾に存在する地形。宮城県の「松島」、広島県の「宮島」と並んで日本三景に選ばれている。

問一　～～～a～dのカタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二　――「焦点」のここでの意味として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　人気　　イ　関心　　ウ　責任　　エ　標的

問三　《　X　》・《　Y　》にあてはまる語として最も適当なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、その記号を書きなさい。

ア　しかし　　イ　すなわち　　ウ　たとえば　　エ　もし　　オ　たしかに

問四　□にあてはまる語句として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　直感的に見抜く　　イ　熱中し、探求する　　ウ　前向きに楽しむ　　エ　想像し、考える

問五　次の一文を補うのに最も適当な箇所を文章中から探し、直前の五字を書きなさい。

彼らはそれを、雑音として聞いてしまうのです。

問六　――①「絵そのものを楽しみながら、想像する楽しみ」とありますが、「楽しみ」の内容として適当でないものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　アルタミラ洞窟の壁画には背景となる物語が存在しないので、見る側が自由に物語を考えられること。
イ　古代ギリシャの壺絵から関連する歴史秘話を思い浮かべ、英雄たちの姿を想像すること。
ウ　『となりにきたこ』や『ぽちのきたうみ』の絵を眺めて想像すると、かくれている物語が見えるようになること。
エ　『ことりのくるひ』では想像力を働かせて、描かれていないものを補いながら内容を読み取ること。

問七　――②「こういうこと」が指す内容として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を書きなさい。
ア　外国では月には「死」のイメージがあり、太陽のようには親しまれていないということ。
イ　外国の絵本には暗く悲しい話が多く、最後まで読みきるのは精神的に困難だということ。
ウ　外国と日本では感性や習慣が異なるため、同じものを見ても抱くイメージに違いがあるということ。
エ　外国では言葉だけの物語本の解釈が日本と異なり、一人ひとりが自由に場面を想像するということ。

問八　――③「絵本が呼び起こすイメージは、目に訴えるものとはかぎりません」とありますが、その理由として最も適当な箇所を文章中から抜き出して、最初と最後の五字を解答欄に合わせて書きなさい。

問九　――④「安野光雄」が作品において最も大切にしていることは何だと筆者は考えていますか。解答欄に合わせて十五字以内で書きなさい。

問十　文章の主題として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
ア　絵本を読む際に他者の力を借りることなく、作品に込められた意図を自分一人の力で読みとることの大切さについて述べている。
イ　絵本を読むときに五感や想像力を働かせ、絵や文字から様々なものを考えて感じることの楽しさについて述べている。
ウ　絵にまつわる物語や物語の見えないところを即座に思い描くことのできる発想力の豊かさについて述べている。
エ　海外の絵本や写真から読み取ることができる文化や自然、人間の暮らしの多様さについて述べている。

問十一　文章中の網かけ部分の内容や表現技法の説明として最も適当なものを次のア～エの中からすべて選び、その記号を書きなさい。
ア　「一度で、ぜんぶ聴き取れるわけではありません。」という表現は、絵本を読む年代の幼い子どもには同時に聞き分ける能力がなく、練習することで成長し理解することができるようになることを表している。
イ　「絵本によってイメージが目にうかび、耳に聞こえ、鼻で嗅ぐことができ、舌に味がよみがえり、肌に触感が感じられる。」という表現は対句法が用いられており、リズムを生み出すとともに直前の文章を強調している。

ウ　「見る者を異次元の世界へつれさる」という表現は、『ふしぎなえ』が読者にこれまで見たことのない不思議な体験を提供しているということを比喩的に表している。

エ　「考えさせる絵本。」という表現は体言止めが用いられており、この文章を通して絵本の話をしていたことを再確認させ、文章の最後であるということを強調している。

【二】次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

小学校にも行かない頃のことである。夜遅くの出来事に思えたが、子供だったせいだろう、実際は八時頃だったのかも知れない。父は帰っておらず、母が何かの都合でわずかの間、家を空けた。

正直にいえば、その頃の私は姉と二人きりになることが辛かった。幼い身では体力の違いはどうすることも出来ない。そういう時の私は、きっとギセイ[a]の生き物が暴君[※1]を見るような目になっていたことだろう。

①その日も何事かがあって、私は台所から布団の敷いてある八畳に逃げて来た。蛍光灯の吊り紐に更に紐を結んで下まで届くようにしてある。私はそれを引いた。闇が消え光が溢れた。私は白いシーツの上に汗まみれの小さな体を投げ出そうとした。

その時ブンという音がして、開いていた窓から何かが、矢のような勢いで侵入して来た。

それは襖や障子、額縁から②蛍光灯にまで狂ったような線を描いてぶつかりながら飛び回った。輝く光の輪に当たった時には蛍光灯は揺れ、薄墨色の埃や古い蜘蛛の巣の糸が、私の上に怪しいほどゆっくりと舞い降りて来た。

恐慌状態に陥った私は、タオルケットで身を覆いながら、座ったまま後ずさりして逃げた。襖のところまで来た時、それはちょうど私の顔の横にドンとぶつかった。私は声を上げ、身を硬くした。

それは、もう一回飛んで柱にとまり、それから③凄まじい声で泣き出した。大きな油蟬だった。[b]異様だった。

私が寝る筈の部屋の中で、夜、威圧するような声で蟬が鳴く。（ｉ）

お腹にじかに響くようなその音は、子供の私が安住していた確かな秩序を、世界を破壊するものに思えた。部屋に満ちたのは間違いなく、異形の恐怖だった。

毛筋ほども動けなくなった私の後ろ、開いた襖の向こうから姉が、大きな瞳をいっそう大きくさせて覗き込んだのはその時だった。

――どうしたの。

私は瞬間に縛られた糸が解けたように、泣きながら姉の胸にしがみついていた。

「それまでにもね、たった一人の妹なんだから大事にしてやれ、とか、そういった類いのことは嫌になるほど聞かされて来たし、理屈では勿論(もちろん)分かっていたわ。でも、わたしは自分の気持ちをどうすることも出来なかったの。一言でいえば、憎らしくてたまらなかったの。やきもちよ。つまり、いつまでも赤ちゃんだったのね」

姉はこだわりのない口調で続ける。(ii)

「でも、あの時に、わたし達が同じ血を持った姉妹なんだって、理屈でなく分かったの」

姉の視線は落ちて、※2玉砂利(たまじゃり)を見た。

「――あの時にね、あんたは何度も同じ叫び声を上げた」

「どんな?」

「あんた、わたしを呼ぶ時に何ていう?」

私は④その言葉を口にした。

「それだよ。それを何度も繰り返した。たまらないよ、こっちは。あんたは二十(はたち)になった。だけど、今でもそういう風にわたしのことを呼ぶだろう。そりゃあ人前だったら、《姉》とか《姉さん》とかいうだろうけど、差し向かいになったら子供の頃と同じ。多分、三十になっても、五十になっても、そうだよ」

私は大きなものに見詰められているような気になって、震えた。

「――結局はそういうことだよ。あんたはわたしをそう呼び、わたしはそう呼ばれる。⑤あの時に気が付いたのはそれなんだよ。それから、わたしは変わった。あんたに対してどうこうっていうより先に、自分が変わったんだよ。いずれはそうなることだけれどね。人間が生きて行くってことは、いろんな立場を生きて行くってことだろう。拘(かか)わりとか役割とか、そういったことを[I]でなく感じる瞬間て必ず来るものだと思うよ」

五歳上の瞳が私を見詰め口元は何かを懐かしむように緩(ゆる)んだ。それから、急に姉は《ほら、ご覧》と広い中庭の反対側を示した。

「凄いね」

いかにも好人物そうな老人が数人の子供に取り囲まれて、竹とんぼをやっていた。老人の手から離れて宙に浮かんだ竹とんぼは、まる

で天空から見えない糸で引かれているように一直線に上を目指した。

神社の社殿よりもはるかに高く、二十メートルは優に上がっただろう。それは常識はずれの高さだった。（iii）

子供達は歓声を上げ、玉砂利に落ちた竹とんぼを拾っては小柄な老人のところにかけ戻る。その度に老人は頭を下げ、丁寧に礼をいっては受け取る。

姉はぽんと立ち上がった。

「行って来る」

玉砂利を鳴らして、姉は軽やかに一直線にそちらに向かった。

⑥背は遠ざかったが、その一歩ごとに姉が私に近付いて来るような気がした。

姉が目立たないような形で私を庇ってくれることが何度もあった。だが私は、それこそ理屈では感謝しなければいけないと分かりながら、何故か硝子の手袋をした手で撫でられているような思いを拭いきれなかった。（iv）

手袋が姉の手にあったのではなく、私の心に硝子の鎧があったのではないか。

姉は子供の輪の中に入り、老人に頭を下げた。私には分からない昔の職人風の恰好をした老人は、頭に締めた鉢巻きを取って姉に礼を返した。それから二人は十年の知己のように話し始めた。

Ⅱ

子供の一人が退屈な問答にあきたのか、老人の腰をつつく。

老人と姉は顔を見合わせ破顔し、二人で子供に何かいった。ごめんごめん、とわびているらしい。

そして、老人は新しい方の竹とんぼを構えると、しゅっと手を擦った。

それは水色の空を目指し、高く高く、飛んだ。

姉は輝くような無心の笑みを天に向けた。上がれ上がれとイノるかのように手は胸の前で合わされ、髪は藍色のTシャツの背で揺れた。

その時、私の心は奔流のように激しく姉に向かった。

「……おねえちゃん」

私は立ち上がりながら、小さくそうつぶやいた。

（北村　薫著『夜の蟬』より）

※1　暴君　―　他人の気持ちを考えずにひとり横暴に振る舞う者のこと。
※2　玉砂利　―　庭や外構に多く敷いて使われる丸く小さな石粒のこと。
※3　知己　―　古い友人のこと。
※4　破顔　―　にっこり笑うこと。
※5　奔流　―　勢いのある流れ。

問一　〰〰a～dのカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなにそれぞれ直して書きなさい。

問二　次の一文を補うのに最も適当な箇所を文章中の（i）～（iv）の中から選び、その記号を書きなさい。
だが、そうだったのだろうか。

問三　[Ⅰ]にあてはまる語として最も適当なものを文章中から漢字二字で抜き出して書きなさい。

問四　[Ⅱ]には次の（X）～（Z）の三文が入ります。適当な順番に並びかえて、その記号を書きなさい。
（X）　いくつかの竹とんぼをそこから出す。
（Y）　姉は無邪気な好奇心を体全体に漲（みなぎ）らせながら、竹とんぼを指さしあれこれと質問している。
（Z）　老人は腰につけた自家製のものらしい三角形の箱を開いて姉に見せた。

問五　――①「その日も何事かがあって」とありますが、その何事とはどんなことだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。
ア　私を家に残して両親が不在であったということ。
イ　姉が私の嫌がるような行動をとったということ。
ウ　寝ているだけで汗まみれになるほど暑かったということ。
エ　窓から何かの生き物が入ってきたということ。

問六　――②「蛍光灯」を別の表現で表したものを文章中から五字以内で抜き出して書きなさい。

問七　――③「凄まじい声」を別の表現で表したものを文章中から九字で抜き出して書きなさい。

問八　――④「その言葉」とありますが、その言葉とは何ですか。文章中から抜き出して書きなさい。

問九　――⑤「あの時に気が付いたのはそれなんだよ。」とありますが、姉はどのようなことに気づいたと考えられますか。その説明

として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　「私」はまだ幼く怖がりな面が残っているため、姉としてこれからは優しく接して守ってやらなければならないということ。

イ　自分にとって「私」は妹であるという事実はこの先いくつ年齢を重ねても変わらず、その関係を維持する努力を続けなければならないということ。

ウ　人間は自分がしたいことをしだいに諦めて、立場を守るために行動しなければならないときが来るということ。

エ　人間が生きて行くということはその立場を生きて行くことであり、これからも姉という立場を生きて行かなければならないということ。

問十　――⑥「背は遠ざかったが、その一歩ごとに姉が私に近づいてくるような気がした。」とありますが、なぜ「私」はそんな気がしたのだと考えられますか。その理由として最も適当なものを次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　姉は「私」のことを大切に思ってくれており、自分ともっと親しい間柄になりたいと思っていると感じたから。

イ　「私」に対して厳しい言葉を掛けた姉だが、言い過ぎたことを反省して「私」に必ず謝ってくると考えたから。

ウ　「私」を置いて竹とんぼで遊ぶ子供たちの元へ行った姉だが、いずれ「私」の元へ帰ってくると確信しているから。

エ　「私」に対する思いが変わった瞬間を率直に伝えてくれたことにより、素直に姉に感謝の気持ちを抱くようになったから。

問十一　次の会話はこの文章について話し合った教員と生徒によるものです。あてはまる語句を［　Ⅰ　］は十八字で、［　Ⅱ　］は十七字で文章中からそれぞれ抜き出して書きなさい。

A先生　この小説を読んで印象に残ったことを教えてください。

B君　姉妹関係を巧みな比喩（ゆ）を使って表現している点に興味をひかれました。

A先生　それはどこから読みとれますか。

B君　姉に対し、「私」が上手く心を開くことができなかったことを［　Ⅰ　十八字　］と表現している点は、姉妹の距離感を上手く表現していると感じました。

A先生　たしかにそうですね。二人を隔てている見えないものが巧みに表現されていますね。

B君　また、この場面を通じてこれからの二人の関係を予感させるものとして、竹とんぼが［　Ⅱ　十七字　］という表現が挙げられると思います。

A先生　そうですね。迷いや悩みが晴れ、今後姉妹の関係がもっと良くなっていくことを予感させる表現ですね。

【三】次の会話は資料を見ながら話し合ったAさんとBさんの会話です。会話をよく読んで後の問いに答えなさい。

Aさん　アイスランドの人は読書量が多いんだね。家にある蔵書の数も他国よりもはるかに多いみたいだね。家に蔵書がなかったという回答も［　i　］に次いで少ないことから、読書が文化として根付いていることがわかる。

Bさん　アイスランドの一般的な［　ii　］が関係するんだろうね。厳しい寒さで日照時間も四時間前後だったら、外に出られない時間も多いんだろうから、家で読書をする時間も増えるんだろうな。

Aさん　でも、自分で本を出版する人も多いということには驚いた。アイスランド国民のうち十人に一人が生涯で一冊は本を作るということもあるらしい。伝記や［　iii　］が多いらしいね。

Bさん　アイスランドの人の生活には本が根付いているんだろうね。自分で読んだり、出版したりする以外にもギフトとして活用しているんだね。クリスマスシーズンには［　iv　］ね。

Aさん　日本にも本カタログがあればいいのになと思う。日本の家庭の蔵書量は［　v　］ね。

問一　資料Ⅰ・Ⅱをよく読んで、［i］は国名、［ii］は五字、［iii］は二字で資料Ⅰ・Ⅱのいずれかから抜き出して書きなさい。

問二　［iv］にあてはまると思われる語句として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　平均でギフトとして自分がもらう本の倍以上の本をあげるらしい
イ　平均でギフトとして自分がもらう本の倍近くの本をあげるらしい
ウ　平均でギフトとして自分があげる本の倍以上の本をもらうらしい
エ　平均でギフトとして自分があげる本の倍近くの本をもらうらしい

問三　［v］にあてはまると思われる語句として最も適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア　資料で挙げられている国の中でアジアでは最も少ない
イ　資料で挙げられている国の中では少ない方に入る
ウ　資料で挙げられている国の中では少ない方で、アイスランドの四分の一以下になっている
エ　資料で挙げられている国の中では少ないが、徐々に増えてきてはいる

資料Ⅰ　在アイスランド日本国大使館ホームページの文章

クリスマスが近づくと改めて感じさせられるのがアイスランド人の読書熱です。クリスマス・ギフトとして最もポピュラーなものが本で、この時期、アイスランド人は平均2.1冊の本をギフトとしてあげ、逆に1.1冊の本を貰(もら)うのだそうです。

実際、クリスマスの１ ～ ２ ヶ月前には殆どの家庭に、その年に出版された数百冊もの新作本を紹介する分厚い「本カタログ」が送付され、家族や友人の間で、「さあ、今年は何を読もうか」といった井戸端談義(いどばただんぎ)が始まる様です。

統計によると、１人当たりの年間の読書量は平均で11.5冊、家庭での蔵書数も世界でトップクラス。さらには「本は読むだけのものではなく、自分でも書く（出版する）もの」との考えも根付いている様で、最近の年間出版書籍数は（人口35万人のなか）1600冊前後。「アイスランド人10人の内１人は、生涯に１冊は本を出版する」というのが当国の常識になっています。

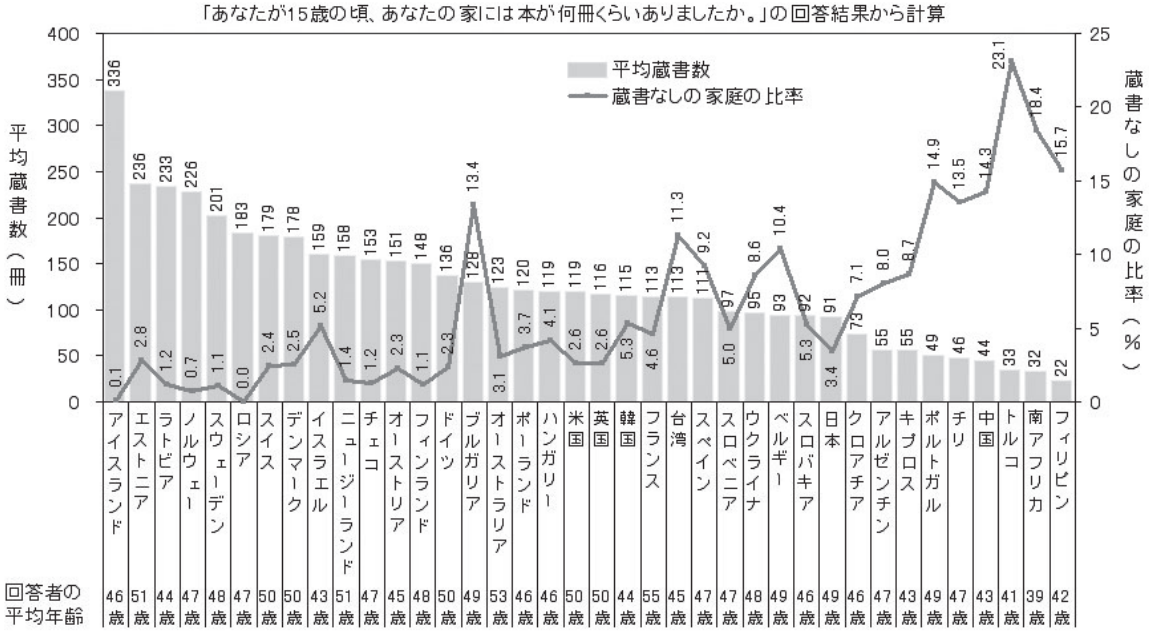
勿論(もちろん)、書くことを職業とする作家による出版が多いのですが、一般市民による「自伝」や「伝記」も相当な数にのぼるそうで、インターネット等の電子メディアの台頭も、この旺盛(おうせい)な読書熱・出版熱にはさほど影響を与えていない様です。

では何故(なぜ)、アイスランドの人達にはこれほどまでに読書熱・出版熱が根付いているのでしょうか？さまざまな説明が可能だと思いますが、やはり「サガ」に代表される口述や記述の伝統が、現在まで脈々と伝わっていることが大きな理由の一つではないでしょうか。

特に、冬の気候が厳しく、日照時間も４時間前後と極端に短くなってしまう当国では、暖炉(だんろ)の回りに家族があつまり、お母さんが編み物を、お父さんが子供達に物語を聴かせるといった標準的な家族の営みが千年以上も伝承され、その話術や読書習慣が極めて自然な形で現在の各家庭にまで引き継がれているのではないかと思われます。

資料Ⅱ　ISSP 国際共同調査による世界の蔵書量比較

家庭の蔵書数の国際比較



【四】次の問いに答えなさい。

問一　次の(1)・(2)の―の誤りを正しく直し、それぞれ漢字で書きなさい。

(1)　友人関係は双互理解が大切だ。

(2)　クラス内の問題は円漫に解決した。

問二　次の(1)・(2)の―のうち、異なる用法で用いられているものが一つある。後のア～エの中からそれぞれ選び、その記号を書きなさい。

(1)　ア　荷物が一向に届かない。
　　イ　彼の言うことは信じられない。
　　ウ　絶望的な状況で打つ手がない。
　　エ　彼女の代わりは誰もいない。

(2)　ア　慰めの言葉をかけられる。
　　イ　兄にプリンを食べられる。
　　ウ　会議で失敗を笑われる。
　　エ　社長が車に乗られる。